

医療・介護の2025年問題

朝日新聞論説委員 梶本章氏

9月25日開催のアフター5、「団塊世代は生きのびられるのかー 医療・介護の2025年問題」と題された梶本章さん(医療介護福祉政策研究フォーラム理事)のお話は、「医療・介護問題は今、危機的状況にある」との強い前置きから始まった。

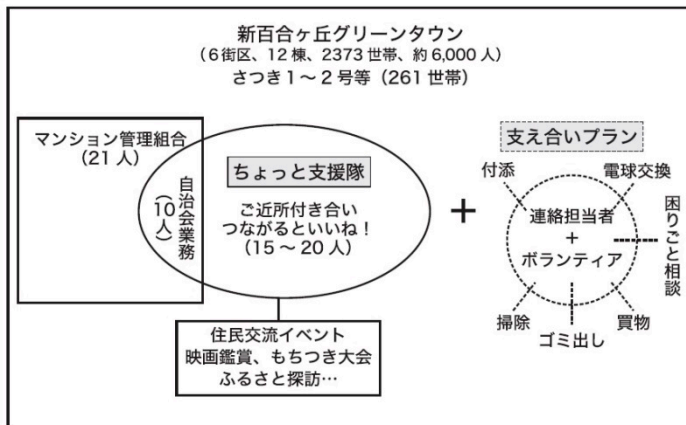
2025年は団塊世代の全員が75歳以上に達する年。団塊世代の一員でもある梶本章さんは、①大都市部を中心に進む超高齢化②増える要介護者と一人暮らし高齢者③死亡者も増加の一途④財政難と労働力人口の減少で医療・介護人材を確保できない——などと、統計資料を元に現状と今後の推移を丁寧に解説した。

そのうえで、ショッキングな数字があるとして、死亡場所別死者数についてのある将来推計表を示し、「2030年には約47万人が、病院、介護施設、自宅のいずれでもなく、死亡場所不明となっている。俺の死に場所は決まっていななんだとびっくりした。ここをどうするかが、これからの大きな政策課題だ」と強調した。

今後については、医療・介護機能の再編が必須であり、解決策としては、住み慣れた地域で医療・介護・住まい・生活支援などが受けられる「地域包括ケアシステム」の推進が欠かせないと指摘する。



団塊世代の末席を汚す筆者がいたく興味を惹かれたのは、幾つか地域で進められている実践例の一つとして紹介された、梶本章さんご自身の居住地、川崎市・新百合丘グリーンタウンでの「くちよっと支援隊」のささやかな実験のこと。



図を参照いただきたい。支援合いプランはまだ提案段階とのことだが、梶本章さんは「医療・介護従事者を増やしていかなければならないが、そのための解答が出ていない以上、自分たちでみられるところは自分たちでやっていたいかなければならないのではないか」と締めくくった。

刺激的な演題の故もあってか、参加者は当日組も含めて29名。小さなクラブの部屋が熱気に包まれた。

(山田潤三)